

一人身にかへたりしと思ふ夜よ仰げは届かざる空の位置なる

パンプスを畳の上に穿きならせるこの倅も漸くならむに

しみくと通ひくる君を斥けて愛撫の風に身を委せるる

我過去を問いし君にも過去ありて互に罪を持ち寄りてゐぬ

薄氷の上をあやふく歩む日は正常なる愛が尊しと思ふ

毛系の玉 『新壑』25-2号

夜おそく灯の消えし家に帰り来て近きところのスウイツチをさぐ  
る

ころくと毛系の玉の転がりて編み急ぐ夜の吾えの反抗

何をも寄するすへなきか黒き畳のへりに毛系の玉の転がりぬ

爪を噛む君が癖のかなしかり形なき愛情を覚えし時にも

軋ませて階段下りゆく吾よ敗れしあとにも姿勢はくずさず

うたゝ寝の吾に夜着をかけくるゝ夫のぬくみの手にめざめたり

人の目

『新壑』3号

人の目を感じ避くるに難き日よもの書くことの容易ならざる

酸ゆきすゆき蜜柑と思ひ皮を剥くこのごろの吾はいたはられた  
くてるぬ

安穩なる日々よと思ひ寝返りぬいまだ薬罐の湯のたぎる肯

豚の餌集めに來る老爺ともこのごろはしたしめり偽りなき冬の  
日

塩さんま提げかへりゆく手がだるく愛すことにも疲れ覺ゆる

雪降れば乙女のごとくはじらいぬ汚濁の記憶の甦りきて

夜

『新壑』  
25-4号

手袋の穴かぐる時にも疼く指の傷ひつそりと夜の吾は小さし

どの子にも頼れずと定めてをれど淋しくて夜の障子に影絵をうつす

くりやへの窓よりみたる厠の灯忘れたるまゝに夜をともしぬ

雪降れば近づく音にも氣づかざりこのごろ人を信じ易くして

何れかに決めねばならずと昼を灯し机の上の白き塵はらへり

望樓に立てる人影小さく見ゆ冬の吾が位置少しずらせば

緋のカーテン風に揺るゝに幼くて吾のむほんは形とならず

味噌瓶の味噌が乾からびてゐることに気づきぬ多忙の妻と思ふに

人の恋にかゝはりなくて淋しさにたえず少しくかかはりを持た  
う

張りつめて次の言葉を待ち居るに膝に射す春の陽のゆらめけり

クレパスにて描かれし壺に紅の花挿してある夜の吾を慰む

癒

『新壘』  
25-6号

手首に癒出来し事も秘密の一つとし自愛に長き冬を過しつ

未手入れの広き庭園のかゝる地所その何分の一吾も持ちたき

美粧院より出づれば春を暖かくセツトローションの香り風と交る

陽に咲けばたくましく見えし福寿草灯のもとにみれば弁をやゝ  
用づ

風邪に臥するとなりの主婦を見舞はむと櫛あてながら何かこた  
はる

水仙

『新壑』  
25-8号

病むことも偉の一つかふるさとの母と起き臥す窓の水仙

ビー玉一つ夜の畳にころがりぬ吾が告白の時機に未だ至らず

くりやべの焜炉におこす赤き火よ同調し来し長き愁ひに

何処まで同調し行ける吾かくりやべにおこる焜炉の炎の赤き

いさぎよく裁かれてみたし妻としての反省にぶき春の夕映

母のほこり

『新壑』  
25-9号

猫が餌あさるまなこを夕べに見つかゝる貧しさは吾にもあらむ

窓下に犬が糞して行く淋しさよ夕べの雲は室にまつはる

心の何処にも吾子の居らざる母われの今日より誇は捨てねばな  
らず

ガラス器に飼はれ金魚の幾日の命か花を挿すにひとしく

白きバッグに幾つの偉もつならむ炎天下に提げてわれの歩めり

氷かけば痺れるまでに指の冷ゆたやすく人になじまむと思ふに



智慧の輪に何時か試めされてるむ吾智慧よ侘しき時を埋め尽  
しぬ

この胸に何時しみつきし百合の花粉不意の疑惑に夏の目暮るゝ

子を愛することにも素直になり切れず赤緒の下駄の捨てたくな  
りぬ

声ぎりぐりに鳴くきりぎりす衰えし吾が情感を呼びさますな  
り

わくらは

病葉を上のかぼみに掃き寄せる吾がかなしみの溜のごとくに

眼の病

『新壑』  
25-11号

不安定な視力に耐ふる日々を咲きつぐグラチオラス記憶に朱き

まなこ

何時よりか眼蝕まれ行きコスモスの花の開きの定かならずも

見極めんとするにうすれ行く左眼の視力に蝦夷菊の紫たぐに黝  
き

癒えたくてこのごろは目に刺戟なるものみな吾よりはなす

漸くに癒ゆるぎざしか祭典の雑沓より見出す吾子は小さし

小さき形

『新壘』  
25-12号

乾せぬまゝ取り残されし干物のはためききこゆ風の中より

ひもじくて林檎を噛りるる夜の床に光をたのめる倅せはなく

煮出し出来るまでを子の靴下繕ひるぬ小さき形に倅せこめて

倅せをはかる秤もなきくりやべか白き豆のふきこぼれつゝ煮ゆる

黒い金魚生きてるしを夜半に唐突に言ひ出し夫は咳入りはじ  
む